

御影堂

急勾配の入母屋造の御影堂は、唐招提寺境内の他の建物と違うように見えます。事実、鐘楼など他のお堂は創業者の鑑真の出身地、中国の様式をより用いて建てられています。一方で御影堂は京都御所のような構造を思い起こさせる非常に日本的な味わいを持っています。寺院群の北端に位置する御影堂の起源は、江戸時代初期（1603～1868）に遡り、重要文化財に指定されていますが、1964年に唐招提寺に移築されたばかりです。それ以前は、興福寺の別当坊として初めは使用されていました。その後、明治時代（1868～1912年）に奈良の県庁になり、その後地方裁判所になりました。

唐招提寺に移転した際に修復が行われ、今日では鑑真の像がここに祀られています。国宝であるこの像は、鑑真が763年に亡くなる前に、その弟子たちが協力して制作しました。像を囲むのは、鑑真に捧げられた一連の扉絵です。これは日本の名誉ある文化勲章を1969年に受けた、著名な芸術家である東山魁夷の作品です。東山は、1930年代のベルリンで西洋美術を学んだが、日本画と呼ばれるジャンルで最も有名であり、日本と中国の風景を描いた壁画を12年かけて制作しました。

御影堂は、鑑真の命日である6月6日をはさむ3日間のみ一般公開されます。ただし、改装のため、お堂は2022年3月まで一般公開されません。